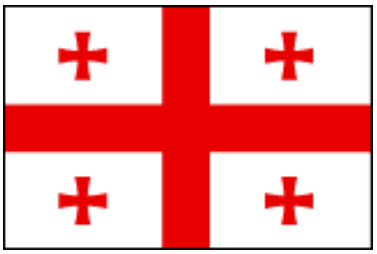
friendship force
NARA

News Letter

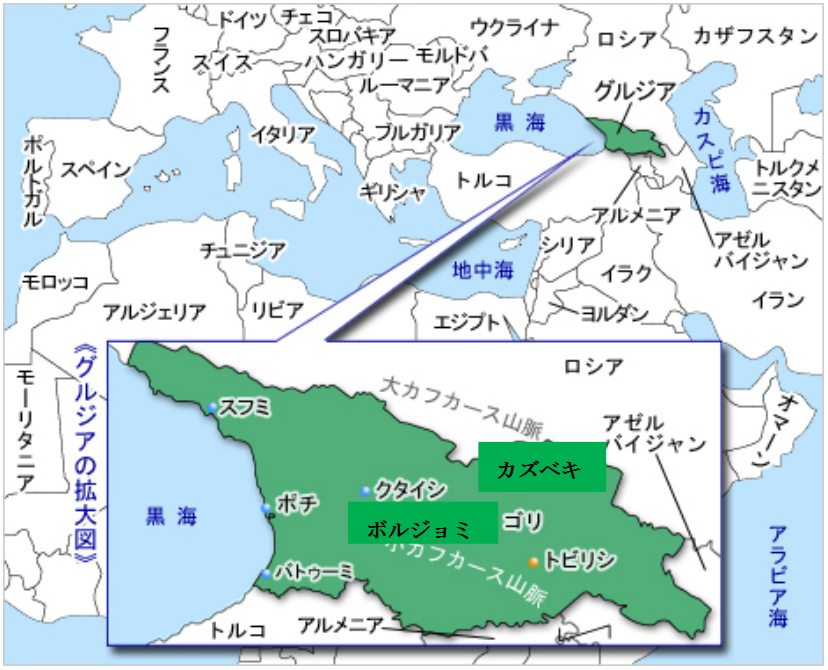
第2号　　2012 August　　奈良

Georgia

グルジア渡航



2012 年 6 月 13 日（水）～30 日（土）



6/13(水)　22:30　関空出発
6/14(木)～20(水)　イスタンブール、
　　トビリシ、ホームステイ
6/18(月)　グルジア国会議事堂訪問、
6/19(火)　国立博物館、野外博物館
6/20(水)　ビール、レモネード工場見学、
　　Farewell party
6/21(木)　グルジア国内観光旅行
　　Uplistsikhe 洞窟都市
6/22(金)　Borjomi-Kharagauli
6/23(土)　Sataplia Nature Reserve
6/24(日)　Batumi　黒海
6/25(月)　Gonio 要塞
　　Botanical Garden
6/26(火)　コーカサス山脈
6/27(水)　Kazbeki
6/28(木)　17:15 トビリシ発、
　　18:45　イスタンブール着
6/29(金)　イスタンブール観光、
　　ブルーモスク、
　　アヤソフィア、トプカプ宮殿、
　　Bosporus 海峡クルーズ
6/30(土)　17:55　関空着

未知なる国グルジアの印象

ED　大西　弘

ＦＦ奈良は１年以上前からトルコの首都アンカラのクラブとの交換が決まっていました。ところが、その後色々な経緯があり、結局アンカラクラブとの交換が中止になりましたが、ほぼ同時に、隣国グルジアの首都トリビシにあるＦＦクラブの会長から熱心な誘いを受けました。
グルジアと言っても我々にはほとんど未知なる国です。僅かに思い出すのは、４～５年前にロシアとの間で南オセチア紛争のあった国。日本の外務省の情報では今でも危険地域に指定されています。不安がないはずがありません。勿論、相手クラブの会長に大丈夫なのかと問い合わせをしましたが、今は全く問題ない、安心してきてほしい、大歓迎すると言う返事が返って来ましたので、好奇心もあり、結局思い切って行く事に決めました。やや波乱含みのスタートではありましたが、「案ずるより生むが易し」で、結果的には大きな問題もなく、予想を超える実り多い渡航となりました。

グルジアはまだまだ発展途上国で、インフラ面では日本に比べて少なくとも５０年は遅れている感があります。日常生活面でも、断水や停電等々で不便な面が多々あり、戸惑いを覚えた仲間も多かったのは事実です。食文化の違いもあります。しかし、それらの不便さを補って余りある素晴らしい発見と素朴で好意的な多くの人々との出会いがありました。

グルジアは 6000 年の古い歴史を持ちながら、常に周辺国からの侵略を受け続け、独立国として繁栄したのは中世の僅かな期間だけであったにも拘わらず、独自の精神文化と愛国心を失わなかったのが大変興味深いところです。この国は北海道の８５％程度の小国ながら、北は大コーカサス山脈、南は小コーカサス山脈に挟まれ、西は黒海に面している為、平野部は気候温暖で、水が豊富で、農業や牧畜にも適しており、基本的に自給自足が可能な自然環境に恵まれています。この自然環境がそこに住む人々の精神文化に影響を及ぼした事は想像に難くありません。我々日本人の気質と相通ずるものを多く感じたのは似通った自然環境のせいではないかと思われます。素朴で穏やかな人々を見ていると、とても侵略を受け続け、他民族の支配に甘んじてきた国民とは思えないものがありました。

国民の心を一つにする唯一の精神的拠り所はグルジア正教だと言われています。自分達が滞在中に接した人々は教会や寺院や十字架を見れば、老若男女を問わず常に例外なく十字を切るのを見ました。他のキリスト教国でこれほど敬虔な国民を見た事がありません。ロシアとの国境近くの所にグルジア正教の大きな新しい寺院が完成間近になっていました。自分達の国を守る決意を表す象徴的な建物なのだと土地のガイドが説明してくれました。
　今秋には真新しい近代的な国会議事堂が第２の都市クタイシに完成します。そして、同時に新憲法が発布され、任期の切れる元大統領に代わって新しい首相の元で新たな議員内閣制が始まります。この国は正にこれから新たな国づくりが始まろうとしているのです。新たな息吹を感じさせるグルジアという国が急に身近になり、この国の人々に好感と共感を覚えるようになったのは不思議という他ありません。

我々フレンドシップ・フォースの活動は政治や宗教とは関係なく、草の根の交流を通して友情を育み、世界平和に貢献する事を目的としていますが、夫々の国の歴史や政治経済事情、文化や生活習慣等々を理解する事なくして、真の相互理解と信頼関係は生れないという当たり前の事を今更ながら今回の交換を通して再認識させられました。違いを知る事が違いを認め合う第一歩なのだと。一方、未知なる国を知る事は限りない好奇心を駆り立て、その喜びを知るものであると強く感じた交換でもありました。

　最後に、我々のグルジア滞在期間中、全ての行程を献身的にフルアテンドして下さった Georgia Tbilisi Club の会長兼 ED の Kate さんに心からの感謝の気持ちを捧げたいと思います。

グルジア ホームステイ 1週間

トビリシクラブの会長兼 ED の Kate は我々一行の守護神のような存在で、まるで母親の如き愛情と心配りを示してくれた。おかげで、別世界で異文化の中に居ながら、不思議なくらい安心感を覚える交換であった。特にホストファミリーとだけ過ごした最初の二日間は実に密度の濃い家族的雰囲気を味わう事が出来た。東部のグルジア正教の聖地シグナギで家族と共に過ごした一日は忘れがたい思い出となった。Kate 一家とは本当の家族のようになった。 **大西**

笑顔と温かいハートの歓迎でした。玄関を入ってまず目に飛び込んだのは、「遠見」と書かれたカード。日本語にも中国語にもありませんが、意味と気持ちはよくわかり、本当に嬉しかったです。

聞けば、Mari がインターネットで日本語に変換し、その文字を真似て書いてくれたのだそうです。その子ども達とはゲームをして、すぐ仲良くなりました。

トビリシ市内の交通量はさすがに多くて、ママの荒っぽい運転にハラハラドキドキ、とうとうパトカーにとめられました。 **河村**

マッチングリスト

No.	アンバサダー	ホストファミリー
1 2	大西弘 大西博美	Kate　Maisashvili
3 4	藤田欣吾 藤田由紀子	Sofiko　Lomia
5 6	河村秋男 河村ひとみ	Maka　Tzignadze
7 8	黒崎力 黒崎知子	Marina　Changiani
9 10	青木俊一 青木照子	Shimonishvili Venera
11	山内昌雄	Kublashvili　Shota
12 13	木村洋子 中森恭子	Irakli　Bebia
14 15	濱田延子 松本朱美	Ana　Changiani
16	安村真弓	Oniani　Dodo
17 18	別所啓子 浅田喜美子	Giorgadze　Meri –Maia

Ana の実家で過ごしたウィークエンドは、湧き水を汲みに行ったり、ホワイトベリーの収穫を手伝ったり、自然を満喫しました。因みにホワイトベリーは完熟したちょうどそのタイミングに収穫する必要があり、たまたまその日に出くわせたのはラッキーでした。これでチャチャをつくるそうです。

トビリシのアパートへ帰って来ると、思いがけない断水、停電に遭遇。おかげでローソクの輝きに気付きました。話題は人生相談にまで発展、夜中までお喋りしました。バザーでたくさん買物をして Ana の支援ができました

濱田・松本

パーティーでタマダ役（乾杯の挨拶を何回もしてパーティーを盛り上げる人）の Shota は 20 代の独身でとても忙しい弁護士です。 **山内**

グルジア ホームステイ 1週間

私達のホストはブティックの女店主。小物は手づくりというのがすごい！　あまりはやっているようには見えなかったが、稼ぎは警察官の旦那より多いらしい。

帳簿にざっと目を通したあと、トビリシ市内観光へ向かった。公園にはレーガン元アメリカ大統領のくつろいだ銅像。自由の国に対する憧れがよく出ている。

やんちゃな男の子二人を寝かせつけてから出かけたのがディスコ。若いホスト夫婦にとって待ちに待った“花金”の夜でした。

藤田

Lile State University “Sunrise” のコーラスグループがグルジアの伝統音楽を披露してくれたり、小さな村の小さな教会へ連れて行ってくれたり。敬虔なキリスト教徒の国という印象でした。　いろいろ素晴らしい体験ができました。　**安村**

共感

違和感

親近感

到着したら、ホストが変わっていました。アパートのエレベーターは上りだけが有料で、ちょっとびっくり。

ロシア語のおばあちゃんも加わって、不思議な、心温まる交流でした。　**木村**

Georgia 伝統音楽の CD を持って行きました。夜は学生達に交って歌とダンス。疲れたが楽しい 3 日間でした。

ここのタクシーにはメーターがなくて、まず値段交渉してから乗りました。　**中森**

ホストの David & Mari は知的で優しくてマナーを心得た紳士淑女で、毎日一生懸命もてなしてくれました。彼は私たちのために 1 週間の休暇を取り、彼女は深夜帰宅の多忙な日々から一転、受入期間中は毎日早退してくれました。

グルジアはインフラがまだ整備されておらず不便なこともあり、食事も口に合うとは言い難いでしたが、David & Mari のもてなしの“心”が最高のプレゼントで、グルジアの発展を心から祈りたい気持ちです。　**黒崎**

何とグルジアには美人が多いのだろう！ホームステイでそれぞれの国の考え方、歴史を実感。最初はおいしい料理だったが、毎日同じメニューでした。　**青木**

グルジアではお客様は神様からの贈り物と昔から言われています。ホストの Maia はお茶目ですが、人の心を大切にしてくれます。そっと気を配る心使いがとてもうれしい日々でした。　**浅田**

Maia、友達の Tea と Lia、私達 2 人、この 5 人で 1 台の車に乗って東グルジアを観光。また実家ではグルジア伝統のパンをいっしょに焼き、お寿司をつくり、最後に 5 人は小指をからめて再会を約束した。　**別所**

グルジア　こぼれ話

狭いのに　ゆったり気分

多少古いがどこにでもある集合住宅。私達の多くがステイした首都トビリシでの住居だ。 独り暮らしの１Ｋに２人のゲストを、それも快く受入れてくれて、ワインで乾杯、郷土料理でもてなし、そこへ友達までやって来てワイワイガヤガヤ。どう考えても狭いのに、なぜかゆったりとした気分になって、騒ぎの中に溶け込んでいた。

夜はベッドで一人、ソファで一人、折りたたみの簡易ベッドでホスト。

シャワーの途中で水圧が下がってやがて断水。ちょっとあわてたが、ホストは慣れているのか、汲み置きの水で事無きを得た。

この西瓜　形違えど　味同じ

都心から少し離れると、道路沿いでスイカを売っているのをよく見かけた。日本の西瓜よりやや長めのラグビーボール型だが、味は日本の西瓜に不思議なほど似ていて、みずみずしく美味しい。

“形違えど味同じ”は西瓜だけじゃなく、人々も。

グルジアの挨拶　いいね！

グルジアの人達は初対面からハグして、頬を寄せ合い、口づけする。これがこの国の挨拶だとわかったが、いきなりのスキンシップに最初から親愛の情を熱く感じてしまった。この習慣、いいね！ちょっとうらやましい気持ち。ところでそれ以上の親愛の情はどうして表現するのだろうと思っていたら、ハグしたまま空中に持ち上げられた。

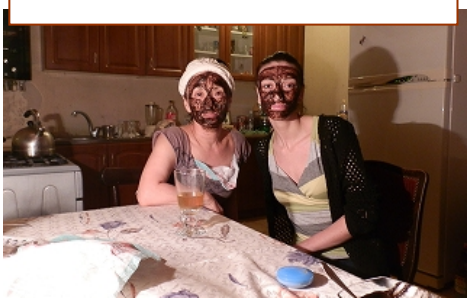
あぁ、でも逆はできない！　横も縦もかないません。

グルジア美人の間で人気の“コーヒーパック”

コーヒーを沸かしたあとの粉でパックすると肌がすべすべして気持ちがいいというので、グルジア女性の間では人気なんだそうだ。

試しているのは、両国二人の美女、アンとノン。

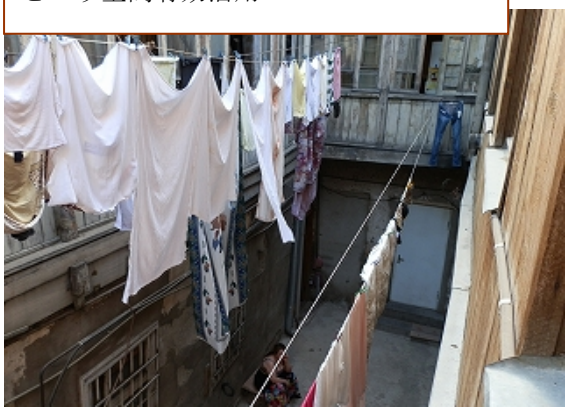
ビフォア・アフターの効果を訊ねてみると、「まぁまぁ」。

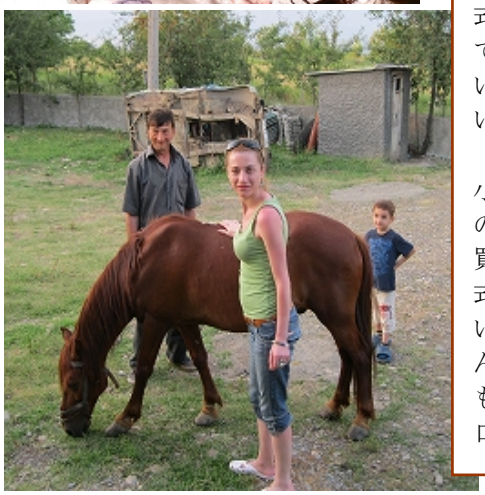


洗濯のロープで結ぶ隣組

ホストのトビリシ市内の住まいはアパートの２階。

１階は店舗。洗濯物を干そうと窓を開けるとそこは中庭の上。中庭に面した各部屋の前をぐるっとロープが廻っていて、それが２階の住人の共同洗濯干場。ロープをたぐって空いているところへ干す。自分の洗濯物が遠くへ行っていると、またロープをたぐって引き寄せる。体を乗り出すと落ちそうになって怖いが、なんという空間有効活用！





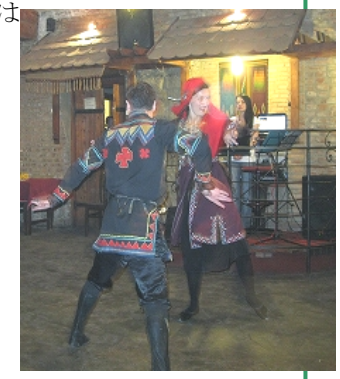
「トイレ、和式よ」「・・・？」

グルジアでトイレが和式というのもおかしな話だが、非常にわかりやすい。洋式の腰掛けタイプでなく、しゃがむタイプ。農家なら外にトイレがあって当たり前だが、それが主に和式。写真後方に見えるのがそれで、家屋内に洋式があっても、いまなお外の和式も使われている。

ところで東グルジアにある小さな町の公衆トイレで管理のおばさんからティッシュを買って入ってみると、４つの和式が並んでいて間仕切りがない！これは日本にない！ひるんでいる私を見て、Maia は「誰も入って来ないように私が入口で待っててあげる」と。

パーティー

トビリシ市内の Sololakis Kari というレストランでパーティー。Farewell party　ではあったが、“はじめまして”のホストファミリーも少なくない。それなのになぜか初対面のような気がしないし、帰り際には名残惜しい。そんななごやかなパーティーだった。



グルジアには***タマダ***と呼ばれるパーティーの仕切り役がある。話し上手で気配りのできる主に年配者がこの役を引き受け、乾杯の発声にはじまる宴会を進行して行く。グルジアでは、“～のために”といろいろ理由をつけて途中何度でも乾杯をする。

今回は一番若い Shota がタマダを務めた。杯を持った腕を互いに組み合って(写真)乾杯するのがこの国のやり方らしい。

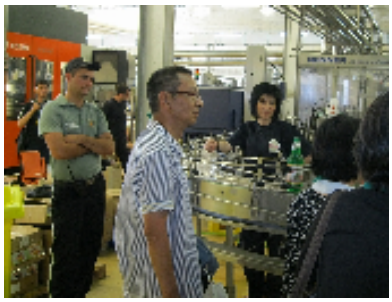
動きの激しいコーカサスの民族舞踊のショーに見とれていたが、やがて誰とはなく祭のハッピに手を通し、他の来店客に遠慮しながら隅っこで踊り始めた。珍しさに集まってきた異国からの来店客に背中を押され、中央へ向かって踊り出すと、みんな加わってとうとう国際的な盆踊りショーになった。

子ども達のチャリティーショー

歌、ダンス、ファッションショーなど子ども達が演じるチャリティーショーや作品販売のイベントに参加協賛。

飲料工場見学

トビリシ近郊にある Natakhtari　という飲料工場を見学。現在トルコの企業と合併しているが、何しろここは良質の水が豊富にあるので、飲料の生産には適している。ビール 6 種、レモネード 7 種を生産し 16 ヵ国に輸出。各国の状況に応じて温度管理その他厳しくチェックしているとのこと。遠来の客として歓待され、試飲やらビールのお土産やら。



ワインは8000年前にグルジアで生まれた！

コーカサスの山から湧き出るミネラルウォーターと世界最古のブドウの原種から、8000年前グルジアでワインが生まれた。そのワインはメソポタミア文明のチグリス・ユーフラテス川を下り、エジプトに渡った。その後フェニキア人によって古代ギリシャ、地中海沿岸と伝わり、ローマ帝国の拡大とともに内陸部へと広大な地域へ広まっていく。

古代のワイン作りの跡

ワインのお話

これまで、アルメニアに残る約6000年前のワイン醸造所が世界最古のワインとされていたが、8000年前にグルジアのシュラヴェリ村で赤ワインをつくっていたことが考古学者によって明らかにされた。陶器のジャーの内側にワインの痕跡を発見したからだ。

山積みにされたブドウの自然発酵からワインが生まれ、それは神から贈られた神聖な飲み物として、主に僧院で作られていた。ワインについて最古の文献はBC2000年頃に作られたシュメール語の粘度版である。

中世ヨーロッパでは、僧院がブドウ栽培とワイン醸造を主導してきた。イエス・キリストがワインを“自分の血”と称したことから、ワインはキリスト教の聖餐式において欠かせないものになった。

近年、グルジア出身のスターリンが、チャーチル英国首相とのヤルタ会談で用いたのがグルジアワインのキンズマラウリ。　チャーチルは「このワインを私は生涯にわたり買い占めたい」と称讃したそうである。

クレオパトラの涙

クレオパトラがグルジアワインをこよなく愛していたそうだ。人前では強権を誇った彼女がグルジアワインを傾け涙したと伝えられている。“キンズマラウリ”は(写真上)それ以来「クレオパトラの涙」と呼ばれようになった。

東グルジアの Kakheti にある WineCeller “KHAREBA” を見学し、試飲しました。

グルジア郷土料理

グルジアの食文化は大きく東西に分けられる。東グルジアではイランの影響で牛肉・羊肉が好まれ、主食は小麦粉のパンで、チーズは塩味。西グルジアではトルコの影響で鳥や七面鳥の肉が好まれ、主食はトウモロコシの粉から作るパンで、チーズは薄味。

グルジア共通の郷土料理といえば、パンのハチャプリ、大きな餃子のようなヒンカリなどがある。

またグルジア正教の習慣で、年に4回野菜だけで作る料理があり、胡桃を使うのが特徴である。この期間は肉、卵、ミルクなど動物性食材を使わない。

ハチャプリ
チーズがたっぷり入ったパン。

ヒンカリ
大型肉入り餃子。中に肉汁がいっぱい。上の方を一口食べ、穴をあけて肉汁を飲んでから食べるのがよい。

チャホビリ
肉とハーブで作るグルジアの代表的料理。ラム肉、牛肉、鶏肉などで作る。

グルジアでは、家庭でもレストランでも、ホテルでも民宿でもメニューは定番料理に限られていて、ほぼ同じ。